

生活科における主体的なかかわり方のできる子の育成
—2学年「のりものにのろう」の体験及び表現活動を通して—

浦添市立仲西小学校教諭

久 場 尚 美

目 次

| | | |
|-----|------------------------|----|
| I | テーマ設定理由 | 1 |
| II | 研究の目標 | 1 |
| III | 研究仮説 | 2 |
| VI | 研究内容 | 2 |
| 1 | 主体的にかかわるとは | 2 |
| (1) | 自然とのかかわり | 2 |
| (2) | 社会とのかかわり | 3 |
| (3) | 自分自身とのかかわり | 4 |
| 2 | 主体的にかかわらせるための指導 | 5 |
| (1) | 子どもが主体的にかかわるために | 5 |
| (2) | 主体的な活動を支える教師の視点 | 6 |
| (3) | 児童の主体的な活動段階における指導のポイント | 7 |
| V | 授業実践 | 8 |
| 1 | 単元名 | 8 |
| 2 | 単元の目標 | 8 |
| 3 | 単元設定理由 | 8 |
| (1) | 生活科の目標から | 8 |
| (2) | 学級の実態 | 9 |
| (3) | 指導について | 10 |
| 4 | 内容構成の視点 | 11 |
| 5 | 指導計画 | 12 |
| 6 | 本時の指導 | 15 |
| 7 | 授業分析 | 16 |
| 8 | 評価資料 | 17 |
| VI | 結果と考察 | 18 |
| VII | 研究の成果と今後の課題 | 20 |
| 1 | 研究の成果 | 20 |
| 2 | 今後の課題 | 20 |

《参考・引用文献》

生活科における主体的なかかわり方のできる子の育成

— 2学年「のりものにのろう」の体験及び表現活動を通して—

I テーマ設定理由

都市化、情報化が進み、物質的に豊かになった現在、生活は多様化してきた。社会の変化に伴って、子どもの生活環境や生活実態も変化し、間接的に知識を得る機会が多くなったことや受け身の生活、自然離れによる遊びの変化など児童の生活経験の不足も指摘されている。

教科書の活字を通して学んだり、テレビやビデオなどの視聴覚機器を通して学んだりすることは、大変意義深いことである。しかし、発達心理学的には低学年の児童は、思考と活動が未分化であり、抽象的思考は困難である。したがって、座学よりも可能な限り面接、五感をはたらかせて対象を認識したほうが小学校1、2年生の児童にとっては理解しやすい。

このような社会の変化や、児童の生活・意識の変容、発達段階への対応として新学習指導要領において、「具体的な活動や経験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について、考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」ことを目標とする生活科が新設された。体験を重視した学習活動を展開し、意欲的に学ぶ楽しさや成就感を体得させることにより社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を目指している。

実際の授業を通してみると、児童は体全体を使って学ぶことで関心や意欲が高まり、興味を持って調べようとする姿勢も見られるようになった。しかし、社会（人々）や自然を、客観的な知識としてとらえたり、結果に満足したりすることで終わってしまう点がみられる。

生活科は児童が自分たちとのかかわりにおいて社会（人々）や自然をとらえることを大切にす。一人一人の違いを大切にし、自分なりのものに気付かせることによって一人一人の取り柄や長所を伸ばし、その子らしさを育てるのである。それは、個性重視の教育への積極的な対応でもある。さらに、自立への基礎づくりとして「それに対してどのように接したらよいか」「自分たちはどんなことをしたらよいか」と考えさせ、適切に、具体的な行動がとれるような主体的なかかわり方ができるように育てたい。

そこで、本研究では、子ども一人一人の達成感や成就感を高め、人々と接する中で自分のかかわり方を明らかにできる「のりものにのろう」を取り上げることにした。乗り物の乗り方を直接的に体験させ、その中で気づいたことを表現活動へとつなげることによって、乗り物のはたらきや利用の仕方が分かり、利用者の立場から、よりよく主体的にかかわろうとする子が育つと考え、本テーマを設定した。

II 研究の目標

本研究は、生活科の基本的な三つの視点とのかかわりを明らかにし、2学年「のりものにのろう」の単元における体験及び表現活動を通して、児童の主体的にかかわろうとする力を育てようとするものである。

III 研究仮説

生活科の学習活動において、具体的な活動や体験をしたり、グループでの表現をしたりなど、直接体験を重視することにより、児童は主体的なかかわり方ができるようになるであろう。

IV 研究内容

1 主体的にかかわるとは

中野重人氏は、「～とのかかわり」とは、自分にとって気がかりで仕方がないとか、夢中になってそのことをやり続けるとか、あるいは、ぼく（わたし）にはそれが必要なのだとか、大切なのだといった状態のことだと分析している。

与えられたものという意識ではなく、自分を主体にして物事に接することを通して児童は、新しい局面に対しても自らが働きかけていくという積極的なものへと自分自身を変えていくことや、事が生じたとき自分はどのようなことができるのかということを通して学んでいく。

人と話したり、一緒に何かをしたり、手伝ったりなどそのとき体験したことが、授業から離れた時や所でいろいろな形でそれらの人々に働きかける能力や態度を形成していくのである。また、事が生じたときどうすればよいのかといった判断力と行動力とを身につけることにもなる。生活科には、基本的な視点として、自然とのかかわり、社会とのかかわり、自分自身とのかかわりの三つの視点がある。それぞれの視点において、主体的にかかわることを通して「自然認識」や「社会認識」「自己認識」の芽を育て、それらを一体的に扱うことによって生活科の究極的な目標である「自立への基礎を養う」ことにつながっていくのである。

よって、児童が三つの視点とどうかかわるかが重要になってくる。

(1) 自然とのかかわり

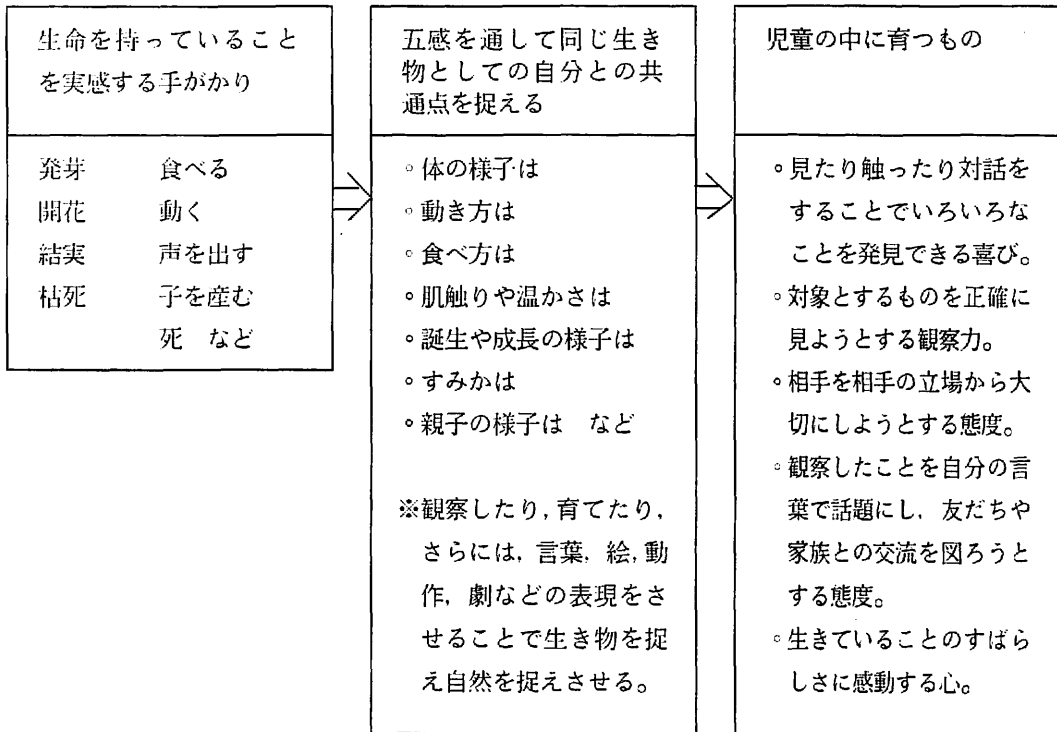
自然とのかかわりでは、客観的認識を育てることよりも動植物と実際にかかわらせる中で、実感として命や成長について感じとらせることが望まれる。それは、低学年の児童は思考と行動が一体化しているので、「生き物」を「生き物」としてとらえるためには、ある時間つき合ってみないと分からないからである。

動植物に触れたり、世話をする中で世話の大変さに気付くことを含め、生長に対する驚きや親子の愛情、温かさを実感し親しみを持つことが大切である。

また、動物の誕生や死に立ち会うこと、植物が枯れ、種を残すことを通して命には成長のみではなく、誕生や死もあることを学び「かけがえのない命」というものを実感として再認識することができる。つまり、納得のいくまでかかわらせることで、人間のおもちゃとしてではなく、生き物として共に生きていこうというとらえ方ができるように高められなければならない。

自然を認識することで、同じ生き物としての自分の生き方に気付かせることへとつなげていくことが自立への基礎となるからである。

○「生き物」としてとらえるために



(2) 社会とのかかわり

社会とのかかわりも客観的な観察や表現ではなく、児童一人一人のこだわりを大切に自分と一体的に施設、道具と取り組むことが大切である。施設、道具とかかわったり、遊んだりしながら自分の興味関心に即して、自由な発想のもとで施設、道具の様子をとらえるものである。

さらに、それは社会科で扱われていた「気づく」「わかる」段階にとどまるものではない。「望ましい行動の仕方を身に付ける」段階までが内容に含まれている。したがって、学校、家庭、近所の人々や公共物と自分のかかわりを考えることのほか、自分もその中で生活するものとして自分には何ができるかを考え、自分の役割を実践できることが期待されるものである。

そしてそのためには、児童の自由な意志と決断が入るような自力の活動をする中で、多くの人々や物とかかわり、人や物との適切な対応の仕方を身に付けるようにさせる必要がある。

| 社 会 科 | 生 活 科 |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ◦社会認識を得させる中心教材は、どの児童にも共通に観察・表現させる必要がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ◦児童のこだわりに応じて柔軟に扱って良い。必ずしも共通に扱わなくて良いので、活動形態も多様多種である。 |

| | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ◦ごっこ遊びは、追体験を通して、社会認識（仕事に見られる工夫への気づき等）をいっそう深めるためのものである。 ◦人や物とかかわる体験活動は、子どもの問題意識を高め、学習を活性化させる便法の一つである。 ◦まとめは、知的理解の整理のためのものである。 | <ul style="list-style-type: none"> ◦ごっこ遊びは、活動や体験そのものに価値をおくので児童の創意工夫と選択の余地が大きく、かかわる人や物の範囲も広い。 (学級、学年、学校の活動へと発展する芽をもっている。) ◦かかわる活動それ自体が意味を持ち、他人と気持ちを通い合わせる体験が求められている。 ◦まとめは、体験を振り返り、自分に何ができたのか、友だちのどんな良さを見つけたのかなど体験で得たものを素材として身近な人との意志疎通を図ろうとするためのものである。 |
|--|---|

○社会とのかかわりを通して育てるもの

- ・公共物を大切に利用する心。
- ・日常生活に必要なことは自分で自分のことをやろうとする態度。
- ・まわりの人々に感謝の気持ちを持ち、意欲的に生活しようとする態度。
- ・多くの人々や物との適切な対応の仕方。
- ・他人に自分の意志を伝える楽しさや喜び。

(3) 自分自身とのかかわり

生活科において自分自身とかかわるということは、指導書によると「自分自身のことや自分の生活について調べ、考え、新たな気づきをするということである」と述べられている。

自分の体の特徴や能力、性格、など自分についてのイメージを深め、自分には苦手なものや弱点もあるけれど、こんないいところもあるんだという、最終的には積極的・肯定的な見方へとつながるものでなければならない。自立への基礎作りとして、自己理解と自己受容をひろげておくことが期待されているからである。

しかしそれは、ひとりよがりのもにならないよう他の個性や人格に出会う場や、他者の目に映る自分の姿を知る機会を設けることが必要である。

中野重人は、生活科と自己認識の関係として、自分の考えたこと、感じたこと、思ったことなど自分の内にある「私らしさ」というものを表出させ、それぞれの個性やこだわり方の違いを浮き彫りにしてあげることが、自分自身の再発見、再認識につながっていくことになると述べている。

このようなことを通して、児童は、集団の中での自分が見えてきて自分に自信を持つようになり、より主体的、積極的に働きかけることになる。

自分自身とのかかわり方でのポイント

- 集団生活になじみ、集団の中の自分の在り方に気付くこと。
 - ・ 仲間意識や帰属意識を育てる。
 - ・ 集団の中の自分の在り方だけでなく、自分と友だちとの違いにも気付く。
- 自分の成長に気付くこと。
 - ・ 自分の成長や生活環境の変化に気付かせる。
 - ・ 自分を支えてくれた多くの人々に感謝の気持ちを持つ。
- 自分ができるようになったことや得意としていること、興味を持っていることに気付く。取り柄や長所に気付く。

手 だ て

- ・ 生活面や学習面での著しい成長の成果を意識的に子どもに返す。
- ・ できるようになったという成果を積極的意識的に返す場を設ける。
- ・ 誕生から現在までの成長過程における周りの人の期待、心配、喜びなども含めて成長の歩みを振り返らせる。
- ・ 友だちも自分と同じようにそれぞれの成長の歩みがあったことに気付かせ自分の個性と同時に、他の個性を受け入れるようにさせる。

2 主体的にかかわらせるための指導

生活科がめざす学力の核心として、木村吉彦氏は三点の核心部分をあげている。

- 主体的な学力……「知りたい」という欲求と「自分から学ぶ」プロセスが大事にされなければならぬ。
(学力の主体性)
- 個性的な学力……「その子らしい学び」「その子なりの学び」を認めてあげる。
(学力の個別性)
- 集団的な学力……「それぞれの学び」の発表の場を確保する。「一人の気付き」を「みんなの気付き」にまで高める必要がある。
(学力の集団性)

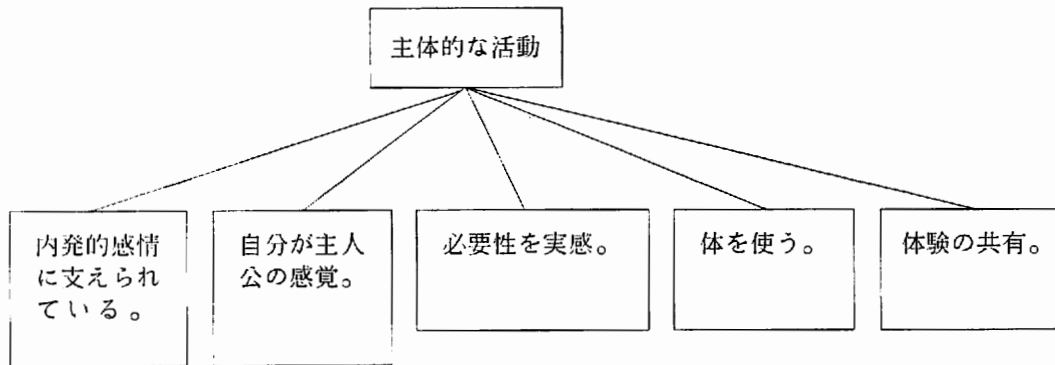
このことから、児童にとって「～したい」「やってみよう」という『自分の願い』を強く持ち、それに支えられた学び方が大切になるのが分かる。そして、学習後は「ぼくできるよ」「すごいでしょ」「〇〇さんにも教えてあげたい」になり、「次は、～したい」という次への意欲を持った主体的な活動が次々と展開されることが期待されるのである。

(1) 子どもが主体的にかかわるために

秋田喜代美氏は、「図説生活科選書1 生活科授業の考え方・進め方」の中で、子どもが主体的にかかわるためには、

- ① 子どもの内発的な感情や意欲に支えられたものであること。
(興味、驚き、感動など様々な情動が絡み合った思考)
- ② 活動を行うための準備や計画段階にも子どもが参加し、子どもたちの問題意識に合わせて活動の方向が決まっていくものであること。
- ③ 自分にとって必要、切実な問題だという実感を子どもが持ち、この活動をなぜやっているのかが子どもなりに分かっていること。

- ④ 身体を使って対象とかかわっていること。
- ⑤ 体験を子どもたち同士、子どもと教師の間で伝え合い、共有すること。
が必要であり、単元展開の上で心得ておきたいのもである。



(2) 主体的な活動を支える教師の視点

① 子ども理解を徹底する。

子どもの願いや欲求などを原動力として、具体的活動や体験を意欲的に進める中で問題を見つけ、自分たちで解決したりするためには、

- ・何に興味関心があるか。
- ・どのようなことにこだわっているか。
- ・どのような見方、考え方をしているか。
- ・どのような経験（体験）をしているか。
- ・どのような活動に熱中しているか。
- ・遊び、友人関係、基本的生活習慣や技能の実態はどうか。

などを調べておくことが大切である。

② 中心となる活動、体験を分析する。

「この単元で児童が身につけることは何か」を押さえ、教材、教具、活動の場所等の場所的、方法的な部分は、融通性をもたせる。

③ 本物の体験を積み重ねさせる。

本物の体験では、失敗することもある。しかし、失敗することで知恵を身につけていくのも学習である。そして、体験をすることで少しずつ自分に自信が出てくる。「自分にもできる」という自己有能感を育てることになるのである。

④ 交流場面を位置づける。

交流場面を設けることにより

- ・活動の見通しが持てる。
- ・活動を見直す。
- ・活動や表現の仕方を学ぶ。

- ・自分を振り返る。
- ・人とかかわりが生まれる。

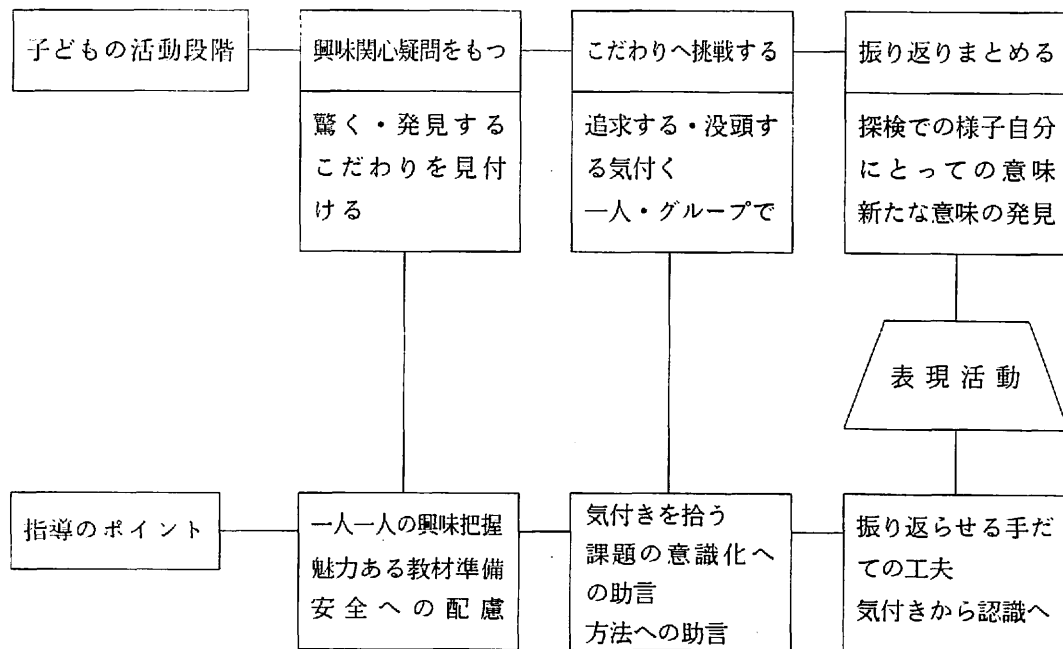
などの利点がある。よって、活動の際、一人で行ったり、ペアで行ったり、グループで行ったりするなど、できるだけ活動の質を深めていけるよう配慮していきたい。

(3) 児童の主体的な活動段階における指導のポイント

興味から出発して認識まで高めるためには、強い感動や実感を伴った魅力ある教材でなければならない。そのために教師は、一人一人の欲求に応えられるような学習教材を整え、そしてその中に児童が自分で選択できる条件を整えておくことが大切である。また、児童の自発性を大事にし、その後の展開を児童に任せるには事前の準備、安全への配慮に注意をはらう必要がある。

一人一人がそれぞれのこだわりに向かって活動や体験を行い、それを少しずつ認識の方向へ高めていくためには、児童の小さなつぶやきや気づきを拾い上げたり、引き出したりしていく。児童の知的好奇心に基づいた行動を見守りながら、必要に応じて助言を与えたい。

活動や体験をしている時は、目の前のことに夢中で自分の行った行動や自分にとっての意味にまで気付かないことが多い。それで、そうした体験活動の後に静かに内省する時間が必要になる。その振り返らせる手だてを観察ノートなどの具体的資料にしたり、表現活動にしたりするなど工夫し、認識まで高めていきたい。



「図説生活科選書 1 生活科授業の考え方・進め方」を参考に作成

V 授業実践

第2学年 生活科学習指導案

1 単元名 『のりものにのろう ―バスにのろう―』

2 単元の目標

- 公共物（身近な乗り物）が分かり、安全に気をつけて、正しく利用することができるようにする。
- 見たことや体験したことを自分の表し方でまとめ、発表することができる。

3 単元設定理由

(1) 生活科の目標から

本単元は、学年目標の(1)「自分と学校、家庭、近所などの人々及び公共物とのかかわりに関心を持ち、集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、適切に行動することができるようにする。」ことを目指すものである。

第一学年では「こうえんであそぼう」において、公共施設の利用の仕方を体験してきている。そこで、ここでは主に交通機関に関する利用について、実際に利用すること（体験）を通して利用者への便宜や安全に対する配慮のありがたさ、利用する者のマナーを学んでいく。

沖縄では、バスは身近な公共の交通機関であり、手軽に利用しやすいので日常生活において大切な役割を果たしている。

しかし、遠足等を通して児童を見ると、乗り物を利用するマナーがしっかり身につけていないと感じることが多い。また、大人の人と一緒に乗った経験がほとんどなので、児童にとって自らの問題としてとらえにくく、一人で乗り物を利用することは難しい。

よって、夏休みの計画（例えば、市立図書館へ行く、祖父母の家へ行く等）の中に一人でバスに乗る体験活動を位置づけることによって必要感と切実感をもった主体的な活動ができると考える。

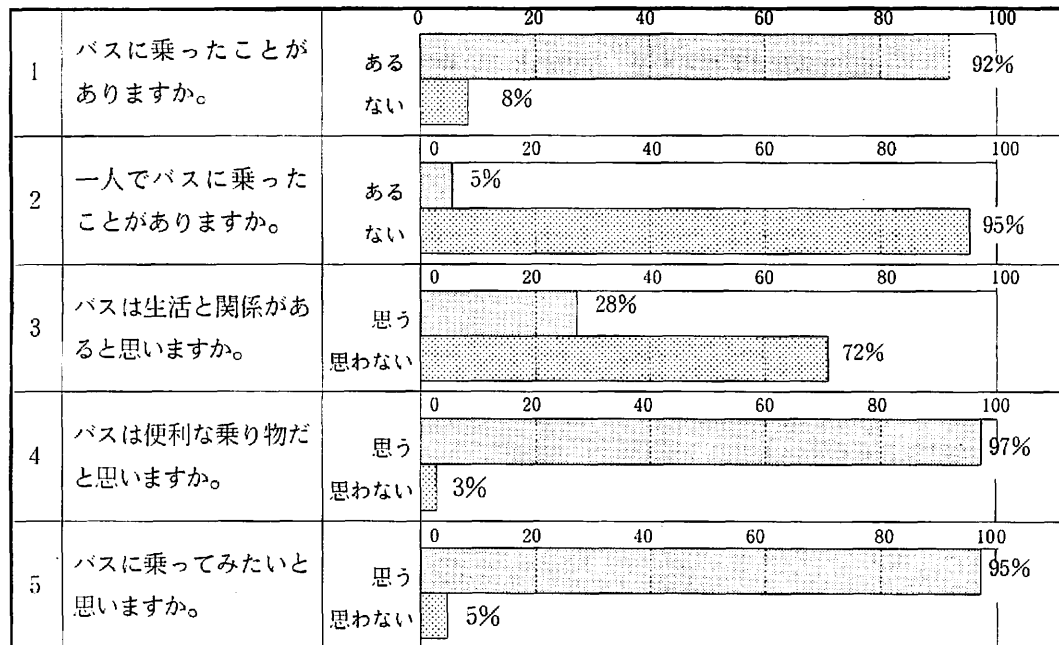
また、目標(3)においては、「身近な社会や自然を観察したり、……活動の楽しさを味わい、それを言葉、絵、動作、劇化などにより、表現できるようにする。」ことを求めている。それは、直接体験と一体となった表現活動が思考を助け、次の活動に生かしたり、体験そのものを振り返ったりするのに役立つからである。

したがって、本単元の後半は、体験活動の中で気付いたことを表現活動へとつなげることにより自分のかかわり方の認識を高めていきたい。そして、一人一人の子どもの気付きの交流の場としてのグループ活動も位置づけていきたい。

(2) 学級の実態

安全に気をつけて正しいバス利用ができ、自分のかかわり方を明確にしていく学習をすすめるにあたって、どの程度の経験や意識があるのか、児童の実態を捉えておく必要がある。そこで、本単元に入る前にアンケート調査をした。結果は次の通りである。

バスについてのアンケート（調査人員39名）



《分析》

児童のバスに対する興味関心は高く、95%の子が乗ってみたいと考えている。バスに乗った経験については92%の子が「ある」と答えており、母親や祖母など、家族といっしょに乗った経験が多い。しかし、一人でとなるとわずか5%の子しか経験がない。したがって、バス利用についてのマナーや安全面への意識はまだ薄く、大人に頼った部分が多いことがうかがえる。

また、バスと生活との関係については、「関係があると思わない」と答えた子が72%で、「車があるから」という理由に基づくものであり、各家庭に自家用車が普及したため、日常生活においてバスを利用する機会が少なくなったことが考えられる。

しかし、その一方で児童は97%が「バスは便利な乗り物だと思う」と答えている。「たくさんの方が乗れるから」「車を運転できない人でも乗れるから」「遠くてもどこでも行けるから」「安く乗れるから」などがその理由であった。

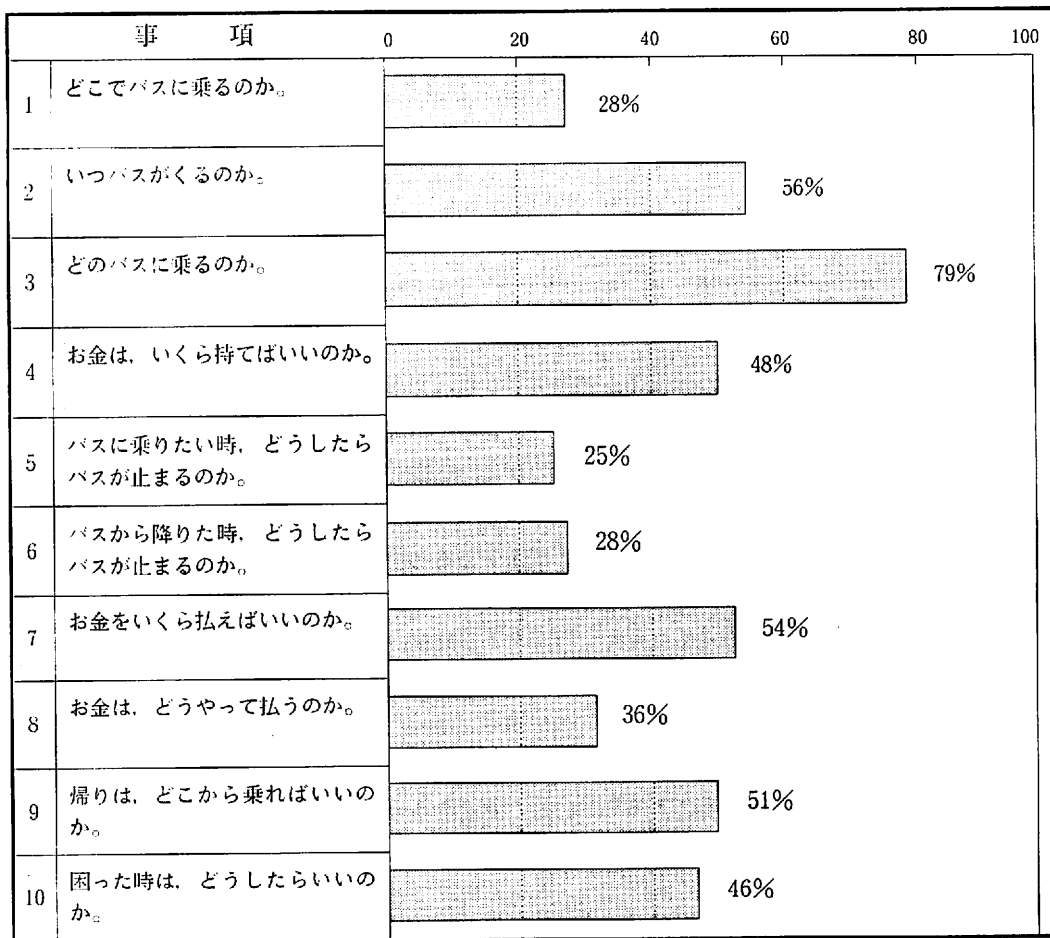
したがって、バスを利用する必要感や、自分の力でやり通す緊張感をもたせた体験活動を設定する必要があると考える。

(3) 指導について

興味を持って、主体的なかかわり方ができるために、次のことに留意して授業を展開したい。

- ① バスに乗った経験を話し合い、バスに乗りたいという意欲を高める。
- ② 一人でも乗れるようにするために、児童の不安を考慮に入れたワークシートを作成し、十分な計画を立てさせること。
- ③ バスを生活の中で利用する必要性をもたせるため、夏休みの計画の中にバス利用を位置づけさせる。
- ④ 夏休みの課外学習にもなるため、学習のねらいや方法を学年通信や保護者会でよく伝える。
- ⑤ バスに乗る体験活動をするにより、正しいバス利用の仕方の理解を助ける。
- ⑥ 自分の行動に振り返らせる手だてとして、体験活動を基にしたグループでの表現活動をさせる。
- ⑦ 主体的に取り組ませるために、まとめ方は作文や絵本、紙芝居や劇等、子どもの発想を大切にす。

バスの乗り方について心配なこと（調査人員39名）



4 内容選択の視点

| 具体的な視点 | 本単元とのかかわり |
|---------------|--|
| 健康で安全な生活 | ○バスに乗る際の不安や危険を解消し、バスに乗る期待感をふくらませ、バス停での安全、バスの乗降、車内の安全、目的地での安全、見知らぬ人にはついて行かないことや、家人との確かな連絡の取り合いなどができる。 |
| 身近な人との接し方 | ○バスの運転手、車内の人、目的地で出会う人（祖父母、親近者、友人、店の人など）と明るくあいさつを交わしたり、臆せず話したりなど受け答えができるようにする。また、人との触れ合いの大事さに気付き、他を思いやる気持ちや態度をもつことができる。 |
| 公共物の利用 | ○汚したり壊したりしないというだけでなく、他の利用者のことを考えてうまく使ったり、配慮をしたりするなどマナーを身に付けることができる。 |
| 生活と消費 | ○目的に応じたお金の準備ができ、子ども料金を正しく支払ったり、用途に応じた支払いが正しくができる。 |
| 情報の伝達 | ○バスに乗って困ったことがあった時には、周りの人に聞いたり、家の人に電話をかけたりして、必要な情報を伝えたり収集することができる。 ○バスに乗った体験を家の人や友だちに言語や絵などを使って伝えることができる。また、必要な事柄を考えて発表会の招待状を書くことができる。 |
| 物の製作 | ○発表会で楽しく、相手によく分かるように発表するためにペーパサート、絵本、紙芝居、劇の小道具などを工夫して作るができる。 |
| 自分の成長 | ○一人でバスに乗れた喜びと、計画が達成できた成就感によって自信を持ち、自分の成長を省みたり、気付いたりできると同時に、自分を支えてくれた人に感謝の気持ちを持つことができる。 |
| 基本的な生活習慣や生活技能 | ○本単元を通して、安全に気をつけて行動したり、気遅れせずに人と対応したり、バス利用のマナーを身に付けたり、必要な情報や資料を集めたり、体験したことを友だちや先生に伝えたり発表したりできる。また、自分を支えてくれた家の人や、運転士に感謝の気持ちを持つことができる。 |

5 指導計「のりものにのろう」(10時間)

(1) 活動名

| 次 | 活動名 | 時間 | 場所 |
|---|---------------------|-----------|--------|
| 1 | バスに乗ったことを話し合おう。 | 1 | 教室 |
| 2 | バス停留所を調べよう。 | 2 | バス停留所 |
| 3 | 一人で乗る計画を立てて、バスに乗ろう。 | 課外 | 市内, 市外 |
| 4 | 発表会の準備をしよう。 | 4 | 教室 |
| 5 | 発表会の計画を立てよう。 | 1 | 教室 |
| 6 | 発表会をしよう。 | 2 (本時1/2) | 教室 |

(2) 主な活動と子どもの意識の流れ

| | 主な活動 | 時数 | 子どもの意識の流れ | 留意点 | 準備 | 評価 | 情報の伝達 |
|----------|--|----|--|--|-------|---|--|
| 興味・関心・疑問 | <ul style="list-style-type: none"> バスに乗った経験を話し合う。 | 1 | バスに乗ったことあるよ。 ↓ また、乗りたいな | <ul style="list-style-type: none"> バスに乗った経験について自由に話し合わせ、自分たちの町を通るバスに関心をもたせるようにする。 | | <ul style="list-style-type: none"> バスに対して関心をもつことができたか。 | <ul style="list-style-type: none"> 情報の伝達 基本的な生活習慣 |
| | <ul style="list-style-type: none"> 学校の近くの停留所を見学し、停留所や乗客の乗り降りの様子を観察する。 | 2 | ↓ バスの種類や時刻がわかって便利だな。 ベンチがあると、疲れにくいよ。 | <ul style="list-style-type: none"> 安全指導をする。 宮城バス停留所へ行く。 見学の視点(施設設備や運転士、客の様子)をはっきりさせ、な | 校区マップ | <ul style="list-style-type: none"> 安全に気をつけてバス停留所の見学ができたか。 バスの利用者にとって利 | <ul style="list-style-type: none"> 健康で安全な生活 身近な人々との接し方 公共物の利用 基本的な生活習慣 |

| | | | | | | | |
|----------------------|---|-------------|---|---|--------|--|--|
| | | | <p style="text-align: center;">↓</p> <p>自分の家の近くのバス停留所も見てこよう。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> | <p>ぜかも考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦乗降の様子からマナーにも目をむけさせる。 | | <p>用しやすい環境であることに気付くことができたか。</p> <p>自分の家の近くのバス停留所がわかったか。</p> | |
| <p>こだわりへの挑戦（気付き）</p> | <ul style="list-style-type: none"> ◦バスに乗る計画を立てる。 | <p>(課外)</p> | <p>どこに行こうかな。ワクワクするね。一人でも大じょうぶかな。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> | <ul style="list-style-type: none"> ◦夏休みの機会をとらえて一人でバス利用ができるように家庭にも協力をお願いする。 ◦ワークシートにそって親子で計画が立てられるようにする。 | ワークシート | <ul style="list-style-type: none"> ◦バスに乗るための計画を立てることができたか。 | <ul style="list-style-type: none"> ◦健康で安全な生活 ◦身近な人々との接し方 ◦公共物の利用 |
| | <ul style="list-style-type: none"> ◦バスに乗ってみる。 | <p>(課外)</p> | <p>がんばるぞ。いろんなものがある。運転士さんは大変だ乗っている人も見てみよう。無事に帰れるかな。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> | <ul style="list-style-type: none"> ◦個々の能力に応じて、片道でも良い事。一区間でも良い事にする。 | | <ul style="list-style-type: none"> ◦安全に気をつけて正しく利用することができたか。 | <ul style="list-style-type: none"> ◦健康で安全な生活 ◦身近な人々との接し方 ◦公共物の利用 ◦生活と消費 ◦情報の伝達 ◦自分の成長 ◦基本的な生活習慣 |
| | | | <p style="text-align: center;">↓</p> <p>やったあ。できたぞ。</p> | | | | |

| | | | | | | | |
|--------------------|---|---|--|---|---|--|--|
| 振り返る (新たな興味や疑問) | <ul style="list-style-type: none"> 発表会の準備をする。 | 4 | <p>↓</p> <p>どの方法で発表しようかな。 早く発表をしたいな。</p> | <ul style="list-style-type: none"> 作文、絵本、紙芝居、劇、クイズ等子どもの発想を大切に。 | <ul style="list-style-type: none"> 画用紙 色画用紙 空き箱 ダンボール 割り箸 はさみ のり クレヨン | <ul style="list-style-type: none"> 見たことや体験したことをもとに友達と協力して発表の準備ができたか。 | <ul style="list-style-type: none"> 健康で安全な生活 情報の伝達 物の製作 基本的な生活習慣 |
| | <ul style="list-style-type: none"> 発表会の計画を立てる。 | 1 | <p>↓</p> <p>プログラムも作ろうよ。 招待状も出そうよ。</p> | <ul style="list-style-type: none"> 仕事分担は、子どもの希望を取り入れて、話し合っ決めてさせる。 | <ul style="list-style-type: none"> とりのこ 用紙 画用紙 | <ul style="list-style-type: none"> 話し合いに積極的に参加し、計画を立てることができたか。 | <ul style="list-style-type: none"> 情報の伝達 基本的な生活習慣 |
| | <ul style="list-style-type: none"> 発表会をする。 | 2 | <p>↓</p> <p>みんないろんなことに気付いているな。</p> <p>↓</p> <p>次、バスに乗るときは～したい。</p> | <ul style="list-style-type: none"> 利用者の立場から、乗り物のはたらきや利用の仕方がわかるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> テーブル コーダー 高とびセット 輪 | <ul style="list-style-type: none"> 協力して発表ができたか。 友達の発表を聞き、共感したり気付いたりできたか。 | <ul style="list-style-type: none"> 健康で安全な生活 公共物の利用 情報の伝達 自分の成長 基本的な生活習慣 |



6 本時の指導

| | | | |
|-----|---|--|---|
| 単元名 | のりものにのろう | | |
| 活動名 | 発表会をしよう | 時 | 9(本時)10/10 |
| ねらい | <ul style="list-style-type: none"> ・グループで協力して、発表することができる。 ・友だちの発表をしっかりと聞くことができる。 | | |
| | 主な活動と内容 | 子どもの意識の流れ | 留意点 |
| | <p>1 学習のめあてを確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>元気な声で、たのしくわかるようにはっぴょうしよう。</p> </div> <p>2 発表時や聞く時、見る時の約束をする。</p> <p>3 発表する。</p> <p>〈プログラム〉</p> <p>(1) はじめのあいさつ</p> <p>(2) うた</p> <p>(3) ペープサート</p> <p>(4) げき</p> <p>(5) 絵本</p> <p>(6) クイズ</p> <p>(7) 紙しばい</p> <p>(8) 先生からのお話</p> <p>(9) おわりのあいさつ</p> <p>4 後片付けをする。</p> <p>5 発表し合ったことについて話し合う。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 元気な声で発表しよう。 ○ がんばるぞ。 ○ 発表は、はっきりゆっくり元気な声で話そう。 ○ 聞く時は、最後まで聞き、友だち良いところを見つけよう。 ○ お友だちは、いろんなことに気付いているな。 ○ ぼくもがんばろう。 ○ そうだったのか。 ○ この問題分かるぞ。 ○ 次、バスに乗る時はそうしよう。 ○ 汽車とバスは、似ているところと違うところがあるね。 ○ 力を合わせてやろう。 ○ 楽しかった。 ○ 友だちの○○なところが良かった。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ これまでの体験活動について、頑張ってきたことをほめるとともに、発表は元気よくできるように激励する。 ○ 約束カードを書き、掲示する。 ○ 発表の内容は体験したことをもとに、自分とのかかわりからとらえさせ、なぜなのか、自分たちはどうしなければならないかなどに配慮する。 ○ 準備 <ul style="list-style-type: none"> ・高とびセット ・輪 ・テープレコーダー ○ 汽車で一人旅をした子の体験を取り上げ、バスも汽車も乗り物として広くとらえさせ、利用者の立場から考えさせる。 ○ 協力し合ってさせる。 ○ 頑張ったことや良かったことについて話し合い、次単元おもちゃ作りの意欲を高める。 |
| 評価 | <ul style="list-style-type: none"> ・グループで協力して、発表をすることができる。 ・友だちの発表をしっかりと聞くことができる。 | | |

7 授業分析

(1) 児童の発表の中に、授業前のバスの乗り方についての不安を、体験を通して克服した発言が見られた。

- ① どこでバスに乗るのか。
 - ・だめだめ、バス停じゃないとあぶないから止まらないよ。(ペープサート)
 - ・あっ、案内板だ。ここがバス停だね。引き込み線もあるんだよ。(ペープサート)
- ② いつバスが来るのか。
 - ・案内板の時刻表を見て、「もうすぐバスが来る」と思いました。(紙芝居)
- ③ どのバスに乗るのか。
 - ・路線バスには、系統番号がついているので、どこに行くのかがわかります。(絵本)
- ④ お金は、いくら持てばいいのか。
 - ・お母さんにきいたら70円と言ったので、帰りの分も合わせて140円をさいふに入れました。
- ⑤ バスに乗りたい時、どうしたらバスが止まるのか。
 - ・手を挙げたらバスが止まりました。(紙芝居)
- ⑥ バスから降りたい時、どうしたらバスが止まるのか。(紙芝居)
 - ・女の人の声で放送がありました。私が降りるバス停の名前を言って、「こちらで降りると便利です。」って言っていました。(紙芝居)
 - ・降りるボタンを押すと赤く光ります。それでバツと全部つきます。だから何十回も押さなくていいんだよ。(紙芝居)
- ⑦ お金をいくら払えばいいのか。
 - ・運賃表を見ればわかります。でも、子どもは半分払うので気をつけてください。(クイズ)
- ⑧ お金はどうやって払うのか。
 - ・お金を間違えないでちゃんと計算して運賃箱に払おう。整理券も一緒に入れないとダメだよ。お金がちょうどない時も、両替ができるので便利です。(絵本)
 - ・コンピューターが計算をしておつりを出すようになっているのがあります。子ども料金の時は、運転士さんがスイッチを押してくれます。
- ⑨ 帰りはどこから乗ればいいのか。
 - ・来た時と反対側のバス停から乗りました。(紙芝居)
- ⑩ 困った時は、どうしたらいいのか。
 - ・運転士さんに「500円で足りますか。」と聞いたら「足りますよ。」と言ったのでほっとしました。(紙芝居)

(2) 体験をし、楽しさや喜びを実感した児童は自分なりの表現方法で表現した。その中には、利用者の立場から公共物をとらえる発言が見られた。

- ・バスはたくさんの人が乗るので、バスを汚さないようにしようと思いました。(紙芝居)
- ・前の上の方を見ると、「ガムを捨てないで」と書いてありました。ガムを捨てたらバスが汚れるからだと思います。みんなで使うバスだから汚さないようにしよう。(紙芝居)
- ・大きくなったら私もつりわに捕まりたいなあ。椅子に座れなくてもつりわに捕まったら、坂

道でもブレーキでも平気です。転んだりしません。(紙芝居)

- ・階段が大きいので歩きやすいように手すりがあります。子どもでも手すりをつかむと昇りやすいです。(クイズ)
- ・バスの運転士さんは、バックする時に窓を開けて手で合図をして安全に気をつけて運転しています。(クイズ)
- ・ワンマンの意味は、運転士さんが一人で運転をしたり、バックミラーで安全を確かめたり、放送や料金のスイッチを押したりして、たくさんの仕事をするからです。運転士さんは忙しいので、騒いだりしないで乗りましょう。(クイズ)
- ・前のタイヤは2つ、後ろのタイヤは4つです。たくさんの人が乗ってもパンクしないように後ろは、頑丈になっています。(クイズ)
- ・暑いなあ。よかった屋根だ。うれしいなあ。すずめも陰で休んでいるね。足が疲れた。ベンチだ。座ろう。ああ楽ちん楽ちん。お兄ちゃん、こんなところにタバコを捨てちゃだめだよ。ごみ箱があるよ。みんなで使うバス停だからきれいにしようね。(ペープサート)
- ・転んでけがをしますよ。座ってください。…おじいさん、シルバーシートへどうぞ。…
- ・赤ちゃんを連れて大変ですね。この席に座ってください。…ちょっとまって、バスが止まってから降りよう。…階段に気をつけて降りてください。…運転士さん、ありがとう。(劇)

8 評価資料

| 評価の観点 | 関心、意欲、態度 | | | | 思考、表現 | | | 気付き | | | 備考 ・発表会での役割 ・児童の感想から ・利用者の立場から施設・設備 についてとらえられる | |
|-------|----------|-------------------|-------------|--------------|---------------------|---------------------|-------------------------|---------------------------------------|----------------|--------------|--|----------------|
| | バスを持つ | バスに乗るために必要なことを調べる | バスの旅ができた | 発表会の準備ができた | バスたんけんの計画を立てることができた | バスたんけんの計画を立てることができた | 人に感謝の気持ちを持ち、手紙に表すことができた | 運転士や自分を支えてくれたことに感謝の気持ちを持ち、手紙に表すことができた | 発表会で表現することができた | バスの利用の仕方がわかる | | 自分のがんばりに気付いている |
| 氏名 | (ワーク) | (行動観察)(ワーク) | (自己評価)(ワーク) | (自己評価)(行動観察) | (ワーク) | (手紙)(観察)(つぶやき) | (行動観察) | | (発言)(ワーク) | (自己評価)(発言) | (発言)(つぶやき) | |
| | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | クイズ | ◎ | ◎ | ◎ | 自信が付いた。 |
| | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | 劇 | ◎ | ◎ | ◎ | 2回目で成功した。 |
| | ◎ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ◎ | クイズ | ◎ | ○ | ○ | |
| | ○ | △ | ◎ | ◎ | ○ | ◎ | ◎ | 紙芝居 | ◎ | ◎ | ◎ | 司会 |
| | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | 絵本 | ◎ | ◎ | ◎ | おかあさんありがとう |

VI 結果と考察

1 主体的なかかわり方ができるようにするための手だて

(1) 内発的な感情や意欲を大切にする。

バスに乗った経験を話し合い、バス停留所の様子を見学し、バスに乗って目的地に行く計画を立てることにより、活動意欲を持つことは、その後の体験活動の原動力となった。

休み時間になるとさっそく探険カードを作る子、友だちや親とバスに乗る練習に出かけ、そのときの気持ちを日記に書き表す子など、夏休みの本番の日にむけて児童の意欲は高められていった。

(2) 自分が主人公であるために

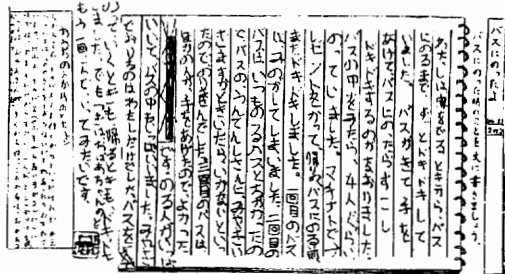
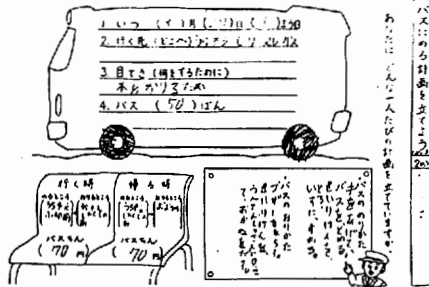
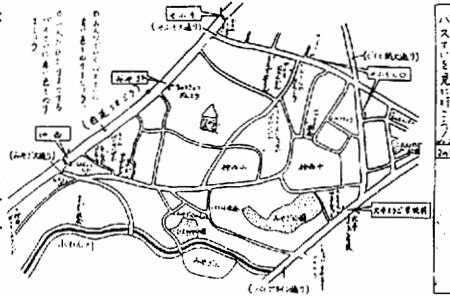
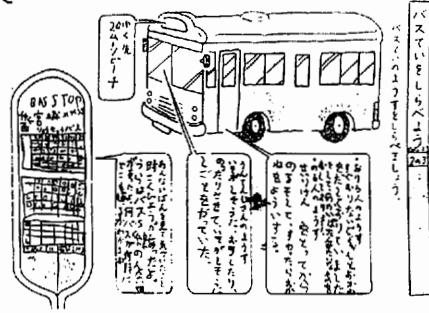
児童はバスに乗ることについて大きな期待を持っている一方、様々な不安を抱いており、それは主体的に活動に取り組む上で、妨げになることが考えられる。そこで不安を解消し「自分にもできそうだ」「挑戦するぞ」と積極的に取り組めるようにするために実態調査を行い、それに基づいてワークシートを作成した。児童はワークシートを基に父母と相談しながら準備と計画を進めていく中で必要な資料や情報を得、各自の不安を取り除けるようにした。

各自がワークシートに自分の家を記入したり、他の友だちとは違う自分だけの計画を立てていく中で自分の力でやり通すんだという緊張感を持って取り組んだ。

そして、出発の前と後に自分の気持ちを書くことで意欲の高揚と気持ちの整理をし、またその都度親からのメッセージをもらうことで大きな励みと自信につながったようである。

(3) 必要性を実感させる。

授業前の児童の実態調査の中で、72%の子がバスは自分たちの生活とはかかわりがないと答えており、28%の子しか公共物として私たちの生活とかかわっているバスの存在を認識していなかった。そこで、バスの利用を夏休みの計画の中に位置づけ、必要

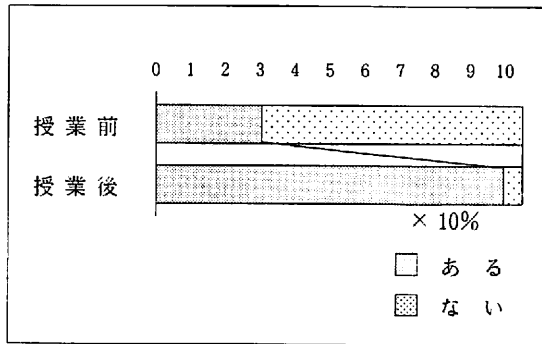


感を持たせた授業を展開していった。

授業後、児童の意識がどう変容したか同じように調査をしてみると、95%の子がバスは自分たちの生活と関係があると答えた。理由は、「年寄りが使うから」「買物をしにデパートに行く時に、車が無くても行けるから」「たくさんの方が乗っているから」「お仕事に行く時に乗っているから」「おばあちゃんの家に行く時にいいから」「自分で市立図書館にも行けるから」などをあげていた。

このことは、①父母の協力を得、市立図書館や親戚の家など目的地に行くための手段としてバスを利用させたこと。②シュミレーションではなく本物の体験をすることにより、他のお客さんなど周りの人々との触れ合いがあり、気づきが生まれたこと。によるものであると考えられる。公共物の利用に関して、それが単に利用できるだけでなく、生活の中で公共の乗り物としてのバスの利用についてとらえていけたように思う。

このことは、①父母の協力を得、市立図書館や親戚の家など目的地に行くための手段としてバスを利用させたこと。②シュミレーションではなく本物の体験をすることにより、他のお客さんなど周りの人々との触れ合いがあり、気づきが生まれたこと。によるものであると考えられる。公共物の利用に関して、それが単に利用できるだけでなく、生活の中で公共の乗り物としてのバスの利用についてとらえていけたように思う。



(4) グループで取り組む表現活動

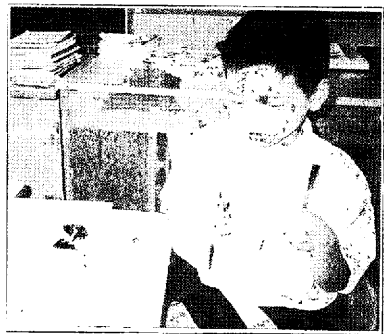
体験や活動したことは、その後の表現活動によって深まり、児童は新しい気づきをする。個々の体験を持ち寄り、グループで表現活動に取り組ませた。その結果、体験を共有できる場ができたことで、児童は自分が気付かなかったことを友だちの体験を通して気付くことができ、思考の深まりが見られた。

- C: 大きくなったらつりわに捕まりたい。
- T: どうして。
- C: だって、座るところが無くても転んだりしないから。
- C: ブレーキかけても捕まっていれば大丈夫だよな。
- C: おばさんがつかまっていたよ。
- C: 坂道でもおとととってならなかったよ。
- T: すごい。いいことに気が付いたね。
- C: 先生、このこと紙芝居に書こうね。



また、表現方法の工夫にも高まりが見られ、「自分らしさ」や「自分なりの方法」を生かして取り組んでいた。

- C: バスのタイヤは6つだから。(画用紙に描いた絵。)
- C: 汽車みたい。
- T: 絵に描くのは難しいね。
- C: バス作れば？



C。 そうだ。ティッシュの箱で作れる。

C。 タイヤは棒でさすと動くよ。

そこでの児童はバスの模型を作り、クイズの答えとしてみんなに模型を見せてわかりやすく説明をすることができた。

このようにグループの子の一言に気付かされ、工夫を凝らすという場面も見られ、表現活動もそれぞれの児童の創意工夫によって深められていった。

VII 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 児童の実態を把握し、それに合ったワークシートを作成し、授業を展開することにより、児童はより主体的にかかわることができた。
- (2) 自分の力で課題を克服したことで児童は有態感・充実感を持ち、「次は～したい」という次への主体的なかわりの芽も見られるようになった。
- (3) 必要性を実感するよう、夏休みの計画の中に活動を位置づけたので、児童はバスを交通手段として、公共物利用の立場からとらえることができた。
- (4) 自分のこだわりを大切に物事にかかわることにより、事柄に対して何故なのかといった意味までを考えた主体的なかわり方ができるようになった。
- (5) グループでの表現活動を取り入れたので、児童相互の練り合いがあり、発表の内容の質に深まりが見られた。

2 今後の課題

- (1) 学習過程における教師の柔軟な対応の在り方。
- (2) 他單元における主体的なかわり方のできる子の育成の実践研究。
- (3) 生活科評価の理論研究と工夫。

《参考・引用文献》

| | | |
|---------------------------------|---------|-------|
| 小学校学習指導要領 | 文部省 | ぎょうせい |
| 小学校指導書 生活編 | 文部省 | 教育出版 |
| 小学校新教育課程の解説(生活) | 中野重人編著 | 第一法規 |
| 生活科実践の基礎基本 | 中野重人編 | 明治図書 |
| 生きる力を育てる生活科の授業 | 今野喜清編著 | ぎょうせい |
| 初等教育資料1994年10月号「生活科の精神と大学の授業改革」 | 木村吉彦著 | 東洋館 |
| 図説生活科選書1 生活科授業の考え方・進め方 | 栗岩英雄他編著 | ぎょうせい |
| 生活科の授業づくりと教師《かかわり方の基礎基本》 | 中野重人他編著 | 東洋館 |
| 生活科授業づくりのテキスト | 有田和正著 | 明治図書 |